

I 本校の研究について

1 研究主題及び副題

問いをもち、主体的・対話的に学ぶ児童の育成

～ICT機器を効果的に活用した授業実践をとおして～

2 研究主題及び副題設定の理由

○ 今日の教育の動向・課題から

今の子ども達やこれから誕生する子ども達が、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。こうした時代の変化の一つとして、コンピュータ等の情報技術の急激な進展が挙げられる。スマートフォンやタブレット PC 等の情報機器は、人々の社会生活や日常生活に浸透し、子ども達が情報を活用したり発信したりする機会も増大している。将来の予測は困難であるが、情報技術は今後も飛躍的に進展し、常に新たな機器やサービスが生まれ社会に浸透していくこと、人々のあらゆる活動によって極めて膨大な情報（データ）が生み出され蓄積されていくことが予想される。このことにより、職業生活ばかりでなく、学校での学習や生涯学習、家庭生活、余暇生活など人々のあらゆる活動において、さらには自然災害等の非常時においても、そうした機器やサービス、情報を適切に選択・活用していくことが不可欠な社会が到来しつつある。そうした社会において、児童が情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいけるようにするため、情報活用能力の育成が極めて重要になってきている。

こうした状況をふまえ、平成 28 年 12 月に出された中央教育審議会の答申の中で、学習指導要領の改善の方向性が示された。知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する平成 20 年改訂の学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質を更に高め、確かな学力を育成することが求められた。そして、次期学習指導要領総則には、学習の基盤となる資質・能力として、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力の三つが挙げられた。情報活用能力の育成が各教科等の特質に応じて適切な学習場面で行われることを重視し、また、情報活用能力を発揮させることで、各教科等における「主体的・対話的で深い学び」へとつなげていくことが一層期待されている。

○ 本校の教育目標から

本校では、全教育活動を通して学校の教育目標「心豊かに知性をみがき、郷土を愛するたくましい子どもの育成」の具現化を図っている。特に、本年度の学校経営ビジョンの学力向上に係る具体的な取組として、次の 6 点を掲げ、学習指導方法の工夫・改善に努めている。

- ① 各種調査等の結果分析と指導方法の工夫改善
- ② 児童が問いをもって学習し、「分かる」「できる」「つかう」ことを実感する授業の展開
(キャリア教育の視点で探究的な学習をつくる)
- ③ 基礎的な知識及び技能の習得と、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育み、主体的に学習に取り組む態度の育成
- ④ ICT 環境を生かした学習指導の工夫
- ⑤ 家庭や地域の関係機関と連携・協働した読書活動の推進
- ⑥ 職員のステージに応じた授業の構築・改善・深化・進化

○ 学校の実態から

平成 28 年度～30 年度まで、「キャリア教育の視点を取り入れた授業の研究」を行ってきた。昨年までの研究により、全職員が「めあてとまとめの一貫性」を意識し、指導方法の改善に取り組み、実践研究を行ってきた。また、学級に大型テレビが 1 台ずつ配置されている環境から、全教師がデジタルコンテンツや教育情報機器を積極的に活用し、授業を行うようになってきている。昨年度は、タブレット PC の導入もあり、児童が学習の中でタブレット PC を活用し、互いの考えを伝え合う場を設定した。しかし、ICT 機器の活用に関しては、目的や活用場面での在り方に一貫性がなく、学校全体で統一されているとは言い難い。

○ 児童の実態から

本校は、新富町の中心部に位置し、各学年 3～4 学級からなる中規模校である。全体的に、授業中の学習態度も家庭学習も良好で、読み、書き、計算などの基礎学力も徐々に定着してきている。学力検査

CRTの結果は、国語・算数ともに全学年においてほぼ全国平均である。しかし、文部科学省が実施する全国学力・学習状況調査、宮崎県が実施するみやざき学習状況調査の結果を見ると、全国の児童と傾向は同じで、主として活用に関する問題いわゆるB問題の正答率は低い。これは、全体的に、思考力、判断力、表現力など既習事項を活用して問題を解決することに課題があることを意味する。また、高学年になるに従って、学力の二極化が見られる。情報活用能力に関しては、パソコン室での指導が主となり、各教科の特質に応じた育成が図られていないのが現状である。

そこで、本年度の研究は、児童が問いをもち、主体的に自力解決を行い、対話的に友達の学びを深めていく学習指導の在り方を追究していく。教師がICT機器を効果的に活用し、また、児童自身もICT機器を使いながら自分の考えを分かりやすく説明・表現したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったりできる姿を目指して、研究を行っていく。このような研究を行うことで、本校の学校経営ビジョン「学力の向上～適切な仕掛けと見届けのある授業」、更には、学校の教育目標である「豊かな知性をみがき、郷土を愛する児童の育成」の実現につながると考え、本主題及び副題を設定した。

3 研究の目標

- 確かな学力を児童に身に付けさせるために、ICT機器を効果的に活用した授業実践をとおして、児童が問いをもち、主体的・対話的に学ぶ学習指導の在り方を究明する。

4 研究仮説

- ICT機器を効果的に活用しながら、主体的・対話的に学ぶこと（自分の考えを整理したり、友達と互いに表現し合ったりすること）を重視すれば、「子どもにとって魅力的な授業」「学びがいのある授業」を展開することができ、児童に確かな学力が身に付くのではないかと。

5 研究内容

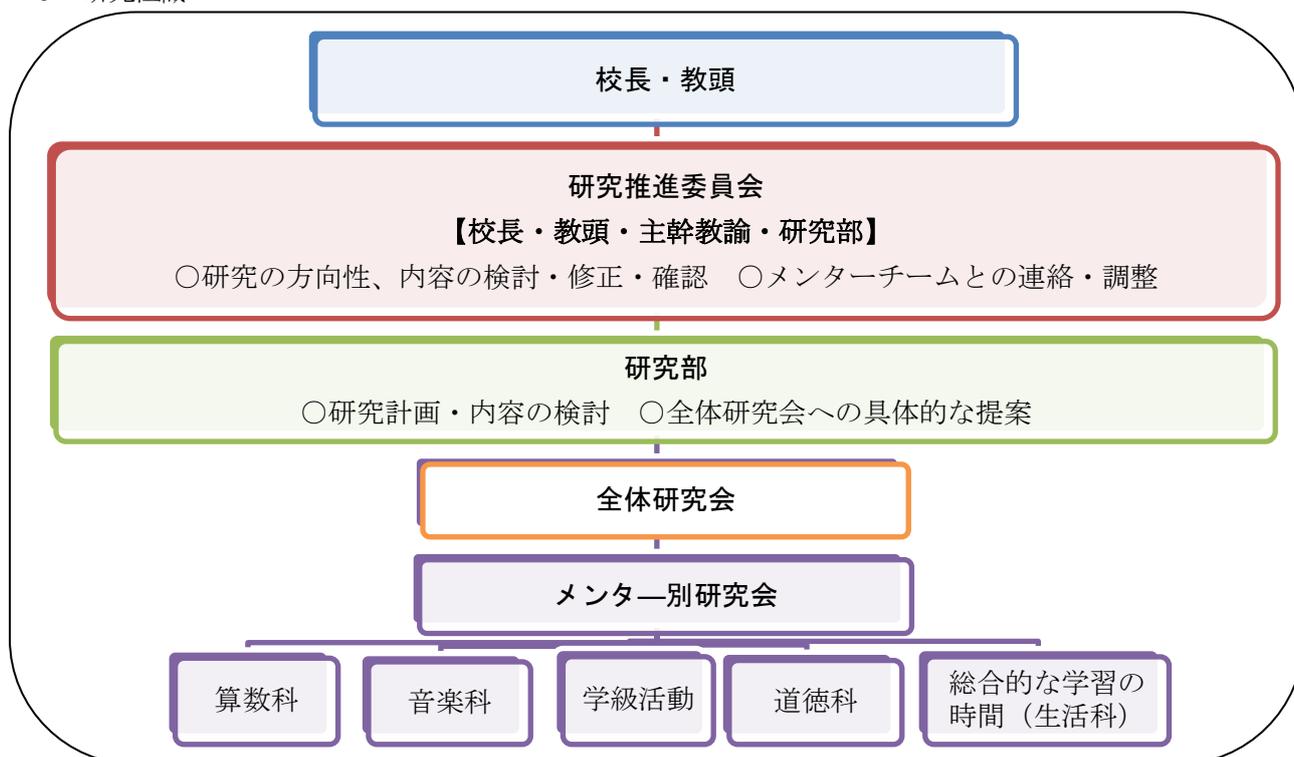
(1) ICT機器の効果的な活用

- 授業における活用の在り方と目的の明確化（インプット・アウトプット・協働学習）

(2) 主体的・対話的な学びを生み出す学習指導の工夫

- 児童に問いをもたせるための課題提示の工夫
- 児童同士が対話的に学び合う場の設定の工夫

6 研究組織



本年度は、主題研究と初期研修とを関連させながら進めていく必要があるため、研究組織の中に5つのメンターチームを編制した。初任者が1年間を通してそれぞれのチームを渡り、すべての教員と関わりながら授業研究を行っていくようにした。

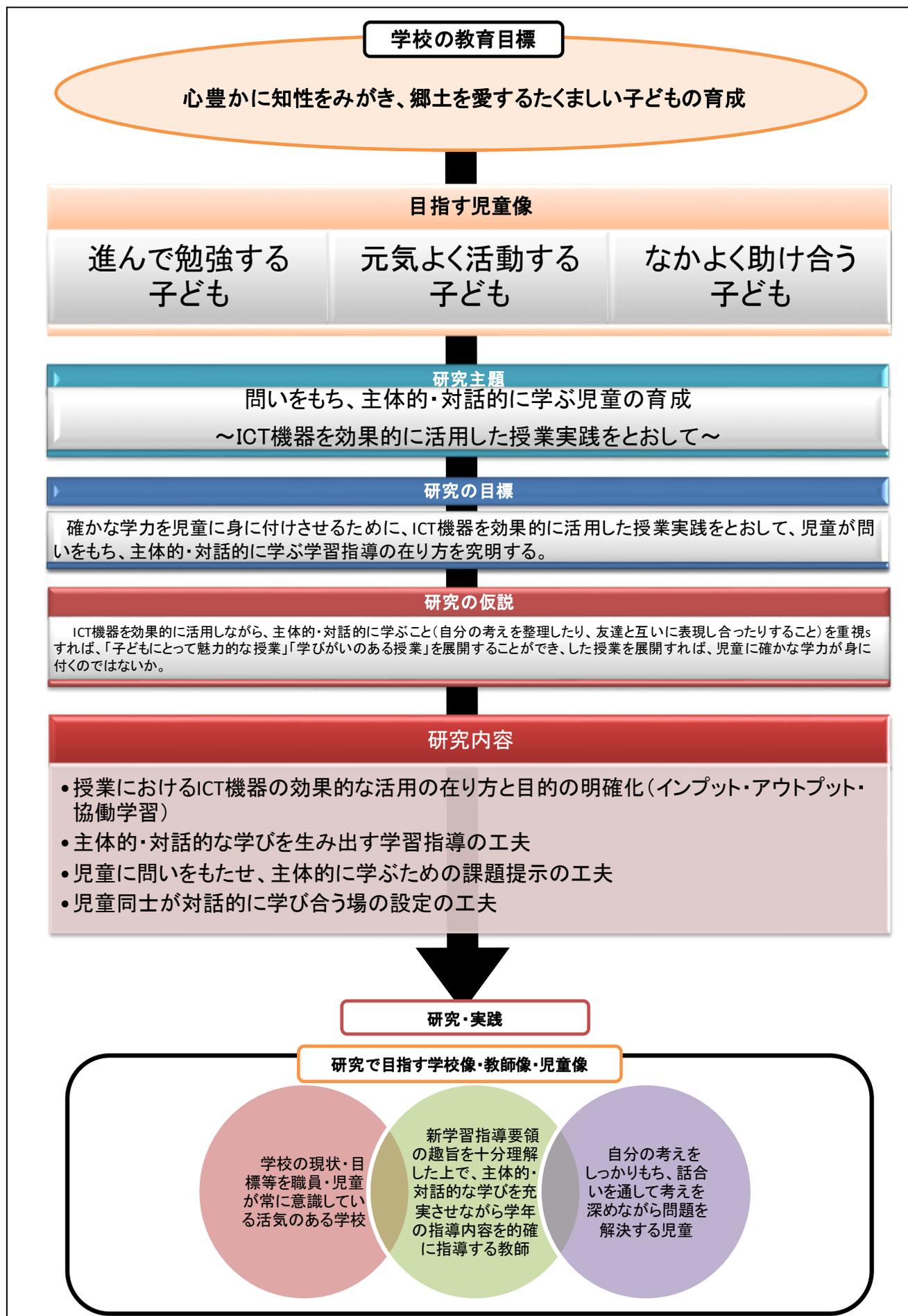
また、初任者以外の教員も全員授業をしながら研究を進めていけるようにした。初期研修との関連を図りながら授業実践年間計画を立て、「事前研究→授業研究→事後研究」のサイクルを全員が実践できる時間を設けた。

【メンターチーム編制】

	算数	音楽	道徳科	学級活動	総合(生活科)
1年					
2年					
3年					
4年					
5年					
6年					

【授業実践年間計画】 ※ 太字□囲みは、初期研修模範授業者

月	5月		6月		8月	9月	10月	
日	8日	22日	12日	26日	未定	11日	2日	23日
初任者の動き	模範	模擬授業	授業① 算数 事後	模範	模擬授業	授業② 学級活動 事後	模範	模擬授業
算数科メンター	授業①	初任者指導(事前)	初任者指導(事後)		事前	授業②	事前	授業③
音楽メンター	※他へ参加	※他へ参加	事前	授業①	※他へ参加	※他へ参加	事前	授業②
学級活動メンター	事前	授業①	事前	授業②	初任者指導(事前)	初任者指導(事後)	事前	授業③
道徳科メンター	事前	授業①	事前	授業②	事前	授業③	事前	授業④
総合メンター	事前	授業①	事前	授業②	※他へ参加	事前	授業③	初任者指導(事前)
月	11月		12月		1月	2月		
日	13日	27日	未定		8日	12日	26日	
初任者の動き	授業③ 総合 事後	模範	研究のまとめ		模擬授業	授業④ 道徳科 事後	来年度の研究の方向性	
算数科メンター	事前	授業④			事前	授業⑤		
音楽メンター	※他へ参加	※他へ参加			事前	授業③		
学級活動メンター	事前	授業④			事前	授業⑤		
道徳科メンター	事前	授業⑤			初任者指導(事前)	初任者指導(事後)		
総合メンター	初任者指導(事後)	授業④			事前	授業⑤		



8 研究経過

月日	主な内容	形態	推進者	初期研修との関わり
4/3	研究テーマ・研究内容・組織・研究計画の協議	全体研	研究主任	
4/10	研究テーマ・研究内容・組織・研究計画の決定 初期研修に合わせたメンターチームの編制	全体研	研究主任	
5/8	研究授業①事後研究会(算数) 研究授業①事前研究会(道徳・学級活動・総合)	メンター別研	研究部・授業者	模範授業参観 (算数)
5/22	初期研修:事前研究会(算数) 研究授業①及び事後研究会(道徳・学級活動・総合)	メンター別研	研究部・授業者	模範授業実践 (算数)
6/12	初期研修:研究授業及び事後研究会(算数) 研究授業①事前研究会(音楽) 研究授業②事前研究会(道徳・学級活動・総合)	メンター別研	研究部・授業者	研究授業及び 事後研究会(算数)
6/26	研究授業①(音楽) 研究授業②及び事後研究会(道徳・学級活動・総合)	メンター別研	研究部・授業者	模範授業参観 (学級活動)
夏季 休業中	これまでの研究内容の確認と軌道修正	全体研	研究主任	
	初期研修:事前研究会(学級活動) 研究授業②事前研究会(算数) 研究授業③事前研究会(道徳)	メンター別研	研究部・授業者	模範授業実践 (学級活動)
9/11	初期研修:研究授業及び事後研究会(学級活動) 研究授業②及び事後研究会(算数) 研究授業③及び事後研究会(道徳) 研究授業③事前研究(生活)	メンター別研	研究部・授業者	研究授業及び 事後研究会 (学級活動)
10/2	研究授業②事前研究会(音楽) 研究授業③事前研究会(算数・学級活動) 研究授業④事前研究会(道徳) 研究授業③及び事後研究会(生活)	メンター別研	研究部・授業者	模範授業参観 (生活)
10/23	初期研修:事前研究会(総合) 研究授業②及び事後研究会(音楽) 研究授業③及び事後研究会(算数・学級活動) 研究授業④及び事後研究会(道徳)	メンター別研	研究部・授業者	模範授業実践 (総合)
11/13	初期研修:研究授業及び事後研究会(総合) 研究授業④事前研究会(算数・学級活動) 研究授業⑤事前研究会(道徳)	メンター別研	研究部・授業者	研究授業及び 事後研究会 (総合)
11/27	研究授業④及び事後研究会(算数・学級活動・総合) 研究授業⑤及び事後研究会(道徳) ★学校支援訪問	メンター別研	研究部・授業者	模範授業参観 (道徳)
1/8	初期研修:事前研究会(道徳) 研究授業③及び事後研究会(音楽) 研究授業⑤及び事後研究会(算数・学級活動・総合)	メンター別研	研究部・授業者	模範授業実践 (道徳)
2/12	初期研修:研究授業及び事後研究会(道徳) 研究授業③及び事後研究会(音楽) 研究授業⑤及び事後研究会(算数・学級活動・総合)	メンター別研	研究部・授業者	研究授業及び 事後研究会 (道徳)
2/26	次年度の研究についての協議・検討	全体研	研究主任	

II 研究の実際

1 富田小学校が考える主体的・対話的な学びについて

夏季研修を使って、「主体的・対話的で深い学び」について共通理解を図った。

主体的・対話的で深い学びとは何か

～「新学習指導要領改訂の要点」(文溪堂)より～

主体的・対話的で深い学びの視点	
算数	○ 問題解決の過程に置いて、よりよい解法に洗練させていくための意見の交流や議論など、対話的な学びを適宜取り入れていくことが必要である。その際には、あらかじめ自己の考えを持ち、それを意識した上で、主体的に取り組むようにし、深い学びを実現することが求められる。
音楽	○ 児童の資質・能力を育成するために主体的・対話的で深い学びを実現すること。その際、活動と学びの関係性や、活動を通して何が身に付いたのかという観点からの学習・指導の改善・充実を進めること。
特活	○ 特別活動は、児童・生徒同士の話し合い活動や、児童・生徒の自主的、実践的な活動を特質としている。「主体的・対話的で深い学び」を実現する視点から授業改善を行うことは、特別活動の本質に関わるものであり、これまでも重要と考えられてきたことにつながるものである。
道徳	○ 他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」を実現すること。
総合	○ 実社会や実生活の中から自らの課題を設定し、多様な他者と協働的に課題解決に向けて、見通しを立てたり、解決のための組織を生み出したり、具体的な学習活動を展開する。そして、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を総合的に働かせた探究活動をすることで、個別の知識や技能は関連付けられて概念化し、能力は汎用的なものになる。

	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
算数	○ 算数科では、児童自らが問題の解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組み、問題解決の過程を振り返り、よりよく解決したり、新たな問いを見いだしたりするなどの「主体的な学び」を実現すること。	○ 算数科では、事象を数学的な表現を用いて論理的に説明したり、よりよい考えや事柄の本質について話し合い、よりよい考えに高めたり事柄の本質を明らかにしたりするなどの「対話的な学び」を実現すること。	○ 算数科では、数学に関わる事象や、日常生活や社会に関わる事象について、「数学的な見方・考え方」を働かせ、数学的活動を通して、新しい概念を形成したり、よりよい方法を見いだしたりするなど、新たな知識・技能を身に付けてそれらを統合し、思考、態度が変容する「深い学び」を実現すること。
音楽	○ 体を動かす活動を取り入れるなどして、児童が音楽の良さを感じ取れるようにし、音楽によって喚起されるイメージや気持ちの変化に気付かせること。	○ 音楽表現をしたり音楽を聴いたりする過程において、「音楽的な見方・考え方」を働かせて、互いに気付いたことや感じ取ったことを交流したり、共有したり、共感し合ったりすること。	○ 児童が音や音楽に出合う場面を大切に、「音楽的な見方・考え方」を働かせて、一人一人が音楽と立体的に関わること。その際、聴き取ったことを言葉や体の動きなどで表現、比較、関連付けにより、音楽との一体感、要素の働きなどを共有・共感すること。
特活	○ 集団生活をよりよくしていくためには何に取り組んだらよいかを主体的に見いだし、活動を振り返り、よい点や改善点を見付け出すことによって、新	○ 集団活動を行う上で合意形成を図ったり、意思決定をしたりする中で、他者の意見に触れ、自分の考えを広げたり、課題について多面的・多角的に考	○ 課題の設定から振り返りまでの過程を「実践」と捉え、一連のプロセスの中で、「見方・考え方」を働かせ、育成を目指す資質・能力は何なのかを明確

	たな課題の発見、設定をすることが可能となり、それが次の動機となること。	えたりすることが可能となること。	にし、意図的・計画的に指導に当たること。
道徳	○ 児童生徒が興味や問題意識を持つことができるような身近な社会的課題を取り上げること。問題解決的な学習を通して一人一人が考えたことや感じたことを振り返る活動を取り入れること。	○ 教材や体験などから考えたこと、感じたことを発表し合ったり、葛藤や衝突が生じる場面について、話し合いなどにより異なる考えに接し、多面的・多角的に考え、議論したりするなどの工夫を行うこと。	○ 教材の登場人物の判断と心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えること。児童生徒の考えの根拠を問う発問や、問題場面を自分に当てはめて考えてみることを促す発問等を通じて、問題場面における道徳的価値の意味を考えさせること。疑似体験的な活動（役割演技など）を通して、実感を伴って理解すること。
総合	○ 課題設定と振り返りを重視する。自分事として課題を設定し、解決の見通しをもった学習活動を設定する。振り返りは、学習中に自らの学びを意味付けたり、価値付けたりして自己変容を自覚し、次の学びへと向かうようにする。	○ 多様な他者と協働的に探究活動に取り組み、生きて働く知識や技能を習得したり、他者から多様な情報を得たり、新たな知を創造する場を構築したりする。また、自己の中で対話、文献で対話、ICT機器でつないで対話など様々な対話も考えるようにする。	○ 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を総合的に働かせて探究することで、個別の知識や技能は関連付けられて概念化し、能力は実際の活用場面と結びついて汎用的となり、多様な文脈で使えるものとなる。

富田小が考える「主体的・対話的で深い学び」

～参考「深い学び」（田村学 著/東洋館出版社）～

主体的な学び

- ・自分ごとの課題を、自分の力で解決し、その過程と成果を自覚すること。
- ・【方策】授業の導入における「課題設定」と「見通し」、終末における「振り返り」の充実

対話的な学び

- ・課題の解決場面において、多くの人の参加による協働で解決に向かって取り組むこと。
- ・【方策】学習形態の工夫、学習環境（ICT機器活用）の充実

深い学び

- ・身に付けた知識や技能を活用したり、発揮したりして関連付けること。
- ・【方策】各教科等固有の学習過程（学びのプロセス）の重視

以上の視点をふまえ、各メンターチームで目指すべき学習活動について確認し合い、授業改善を行うことにした。授業実践にあたっては、主体的・対話的な学びを生み出すため、「授業の導入における『課題設定』と『見通し』」、「終末における『振り返り』の充実」、「学習形態の工夫」、「学習環境（ICT機器活用）の充実」の4点を意識して取り組むようにした。事後研究会でも、この4点についてとった手立てが有効であったかを検討した。検討後は、話し合った結果をふまえながら各自で振り返りシートを作成し、授業改善へとつなげていった。